SEMINAIRE OUVERT PERMANENT

juin 2005

セミネール通信　2005 年６月

公開セミネール『心的構造論』　藤田博史（精神分析医）

第 28 回第 28 講「精神病の構造的治癒理論とその治療技法（16）」

2005 年６月 11 日（土）　13 :30-16 :30（開場時間も 13 :30 になります）

第 29 回第 29 講「精神病の構造的治癒理論とその治療技法（17）」

2005 年７月９日（土）　13 :30-16 :30（開場時間も 13 :30 になります）

第 30 回第 30 講「精神病の構造的治癒理論とその治療技法（18）」

2005 年８月 13 日（土）　13 :30-16 :30（開場時間も 13 :30 になります）

会場：日仏会館　50９号室　聴講料:1000 円

日仏会館　東京都渋谷区恵比寿 3-9-25　JR 恵比寿駅東口から「動く歩道」経由で徒歩 10 分

主催：ユーロクリニーク　協賛：ドール・フォーラム・ジャパン

問合せ先：ユーロクリニーク文化部　TEL: 042-308-7637　E-mail: ys@euroclinique.com

SÉMINAIRE OUVERT PERMANENT

FUJITA,Hiroshi (psychiatre-psychanalyste)

Le 28ème SÉMINAIRE　samedi　11 juin 2005------13h30-16h30

Le 29ème SÉMINAIRE　samedi　9 juillet 2005------13h30-16h30

Le 30ème SÉMINAIRE　samedi　13 août 2005 ------13h30-16h30

SALLE#509 DE LA MAISON FRANCO-JAPONAISE

Frais de participation :1000yen　LA MAISON FRANCO-JAPONAISE

10 min.à pied depuis la Sortie Est de la Gare d'Ebisu(ligne JR Yamanote)

Organisation:L'EUROCLINIQUE　Collaboration:DOLL FORUM JAPAN

Renseignements:BUREAU CULTUREL DE L'EUROCLINIQUE

TEL: 042-308-7637　E-mail: ys@euroclinique.com

発行

EUROCLINIQUE

編集

ユーロクリニーク文化部

目次

公開セミネール案内	1	ヨーロッパ美術紀行　清水由美子	5
『セミネール断章』藤田博史講義	2	「マンスリー連続対談シリーズ」より	6
	3	information　ユーロクリニーク案内	7
『ブレーキを踏もう』佐藤良平	4	精神分析ワークショップのお知らせ	8

SÉMINAIRE OUVERT PERMANENT

公開セミネール『心的構造論』より

「セミネール断章」

講義　藤田博史

編集　榊山裕子

Le 26ème SÉMINAIRE

第 27 回第 27 講「精神病の構造的治癒理論とその治療技法（１５）」より

samedi 14 mai 2005　2005 年５月１４日(土)　日仏会館(東京・恵比寿)

（『セミネール断章』は、公開セミネールのご紹介として、講義より抜粋して掲載しています）

集団精神分析の可能性　５月14日14時10分　日仏会館509号室にて

今日は皆さんにインターラクティヴ interactive に話してみたいと思っていることは、従来型の精神分析は、もちろんご存知のようにフロイトが創始して、個人のレベルで発達してきた。つまり個人のなかにおけるコンプレックスとか、個人の発達過程とか、あとは個々の症例についてとか、常に単位が個人だったのです。

その個人の枠から抜け出して、人間は一つの集団を成していて、その集団に対しての精神分析、あるいはそういう精神分析理論を構築するにはどのようなことが前提になるかということは、フロイト自身が考えていたことなのですが、まだ現代のこの時点において、集団に対する、人間が集団を成したときの精神分析的な決定的な理論というのは未だ提出されていないのです。部分的なものはあります。　フロイト自身が書いている「集団心理学と自我分析（Massenpsychologie und Ich-Analyse, 1921）」という有名な論文がありますが、そこで述べられていることは「自我理想」といって、個々人というのは自分が一つの規範にするような自我の理想になるような人物を外部に持っている、その外部に持つ人物を共有するようなことが起こる。一人一人の自我A、自我B、自我C、自我Dとなると、これらの延長上にあるのが「自我理想　」・・・　Ideal-Ich（理想自我）いう言葉もありますがこれは全く意味が違う別の単語ですが・・・この場合は　「Ich-ideal　自我理想」を共有している。

集団における心理学は、実はその masse（マス）、その集団をひとつの塊として見ると、その一つの塊がまた一つの個人、一つの生命体、一つの人格として見なすことができる。だからある集団を観察した時に、必ずその集団には何か Ich-Ideal に相当するような点（ポワン）がある。たとえば日本人と言った時、日本人の集団と言った時に、拭い去り難いこの point（ポワン）に相当するものして天皇の position（ポジシオン）がある。老いも若きも、天皇制を否定する人も肯定する人も、否定するということは一つの point（ポワン）として埋め込まれているわけですから、日本人という集団にとって、たとえば天皇制は、自我理想の position（ポジシオン）を占める何者かなのです。

このようにして必ずある集団、たとえばある企業、トヨタならトヨタの一番元になるような自動織機を編み出した豊田佐吉とか、そういう創始者のことが頭に浮かぶだろうし、松下グループに勤めている人は必ず社員教育の中で、松下幸之助のことが出てくるだろうし、何か Ich-Ideal　あるいはこれが顕在しているとは限らなくて潜在的にもあるのだけれども、そういうものを何か共有しているという考え方です。

こういうものがまったくないと集団をなし得ない。それはもう一つの群衆にしか過ぎない。何故こういう個々の人間が集まった集団に対する精神分析あるいは精神分析理論が必要なのかというと、これが人間が行なっている経済活動と密接なつながりを持っているからなのです。経済の動向はある程度は読めるけれどもまだ読めない部分が沢山あるわけでしょう。毎晩「ワールドビジネスサテライト」とか見ている人ならばわかるでしょうけれども、こうくるだろう、と思っていたことが外れたり、こんな商品ヒットしないよ、と思っている商品がヒットしたり、予測不能なところがまだ非常に多いのです。人間の知性がもう少し発達して、集団に対する精神分析がもう少し発達すれば、もっと今よりよりよく経済的な力動というかダイナミクスも読むことが可能になってくる。

それはあたかも個人のレベルで、昔は人の心なんてわからない、それぞれ個性があって、それぞれ人格があって、人の心なんかわからないと言われていた時代から精神分析が出てきて、ある程度人の心を規定するようなコンプレックスとかトラウマとか発展段階とか固着とか、そういうものが発見されてくることによって、ある程度個人のレベルにおける精神分析の理論は精神分析の経験とともに積み上げられてきているわけです。実際にそれで精神症状を改善したり、消し去ることができるようになっている。そうして更に集団のレベルで精神分析が再構成されていくならば、人間がその欲望によって動かしている経済・・・要するに経済というのは個々の人間の欲望の寄せ集め、個々の人間の欲望の集大成というか、そういうものですよね、だから個々の欲望と集団になった時の欲望がどんな関係にあるのか、ということがもう少しよりよい形でわかってくれば、精神分析と経済学が結びつくわけです。そういう分野を新しく学問的な領野として確立させる必要があるわけです。

心的装置と集団　5月14日14時50分　日仏会館509号室

そうすると集団というのはどのように考えることができるのか。集団というのはあたかも心的な装置の外部を共有しているという幻想の元に成り立っている。どんな構造か。たとえばこれが社会としますね。社会というのは一つの幻想かもしれない。あるいは集団と言ってもいい。従来型の集団の考え方は集合になっていて、この中に個人が入っていますよというような・・・これで何が言えるのでしょうか。集団というのは個人の集まり、これでは何も言えません。これはただ単に運動場に出てきた小学生を見ているだけで、個のレベルでの内と外とかそういうものも全く考慮されていない。

実は個で集まった集団というのはどのように出来ているのかと言うと、こんな風に考えるのです。つまり集団という一つの釣り堀の池だと思ってください。釣り堀の池に竿を垂れている人たちがいる。竿というのは何かというと、この心的装置の外部に相当する。では内部は何かというとやはり永遠に共有できない部分です。つまり集団と個の関係というのは、心的装置の半分が共通の釣り堀のなかに入り込んでいる状態です。この図から見て面白いことは何かと言うと、社会というのは外ではなくて閉じられた内側なのです。

今まで何度か話したことがありますが、わたしが実際に治療していた患者さんで、「先生、皆、社会に出る、社会に出る、って言うでしょう。早く精神病院から元気になって社会に出ようよって皆、言うんだけれども、僕は社会にでる、というその意味が全くわからないのです。社会というのは入っていくものなのです」その人はすごく鋭いというか、目から鱗でハッとしました。社会というのは出ていくものではないですね。社会はその中に入っていくもの、そういう意味では社会というのは閉じられた空間です。だから人間の自由な精神というのは実はその社会の外部にある。

Copyright 2001-2005 foujita hiroshi, All rights reserved

ブレーキを踏もう

佐藤良平

連載１９　インフラ大衰退時代が来る

TVアニメ作品「母をたずねて三千里」のロケーション・ハンティングをするために宮崎駿がアルゼンチンを訪れた時の話を、どこかで読んだ覚えがある。彼の談話の中に印象的なエピソードがあった。首都ブエノスアイレスの中心部には40階を超える超高層アパートが幾棟も建っているが、それらの建物の多くではエレベータが使えないというのである。

近世以降でアルゼンチンの勢いが最も強かったのは1940年代だった。その時代、北半球の先進国は第二次大戦を戦って軒並みヘトヘトになっていたが、南半球にあって戦いに巻き込まれなかったアルゼンチンはほぼ無傷だった。彼らは特産品である牛肉を飢えた北半球にドカドカ輸出して、空前の利益を上げた。件のアパート群は、その頃に建てられたものだ。しかし、程なくペロンの独裁体制が破綻して国力は低下の一途をたどり、今ではすっかり貧乏国に逆戻りしてしまった。アパートのエレベータが壊れても修理することさえできない。ところが、かの街では高層アパートに住むのが今でもステータスであり続けているため、見栄を張って住み続ける高貴な人々は自ら階段を歩いて昇降しているという。

我々は、このエピソードからどのような教訓を学ぶべきだろうか？　私が見出したのは次の二点だ。すなわち「人々は国力に見合ったインフラストラクチャー（建造物）を欲しがる」そして「国力のピークは永遠には続かない」という冷厳な事実である。例えて言うなら、果たして建設することに意味があるかどうかはともかく、今のエジプトは再びピラミッドを建てるのに充分な国力を（おそらく）持たない。彼らは没落してしまったのだ。

私は東京オリンピック大会の年・1964年に生れた。日本の高度経済成長をリアルタイムで味わうことができた最後の世代に属する。私の生年に東海道新幹線と東名高速道路が開通し、会場設備や首都高速道路を含むオリンピック向けのインフラが整えられた。都心では木造の建物が次々とビルに建て替えられ、郊外には巨大な団地が造成された。それまでは考えられなかった大型のインフラが怒涛のように現実のものとなっていった。地上36階の超高層・霞ヶ関ビル。西新宿の副都心計画。新幹線と高速道の延伸。そういった流れの頂点に1970年の大阪万博があった。国土整備はオイルショックの後もしばらく続き、青函トンネルと本四架橋という巨大プロジェクトが成就したあたりでようやく止った。

日本において、インフラはどのような考えに基づいて作られるのだろうか？　第一義は「こんなこといいな　できたらいいな」という野比のび太レヴェルの素朴な欲求を満たすためでは決してない。まず土建屋を食わせるために彼らの仕事を創り出す必要があり、政治家が票を得るための人気取りの道具なのであり、技術力の高さを諸外国に見せつける欲求があり、さらに言えば日本国民の自己満足のためであった。「作れるから作る。それがなぜ悪い？　経済面でも技術面でも、あんなインフラを作れる俺たちは偉いんだ」という幼児そこのけの自己顕示欲に駆られて、必要以上に豪華な建造物が日本各地に出現したのである。ここまでが第一の教訓「人々は国力に見合うインフラを欲しがる」の実体だ。

さて、話を第二の教訓「国力のピークは永遠には続かない」へと進めよう。先に述べた高度経済成長期が日本の国力のピークであったことは、もはや自明の事実である。あのように気狂いじみた経済発展を日本が再び迎えることは、まず当面期待できまい。国民の少子化・高齢化・白痴化の三点セットは急速に進行しつつある。成長への意欲を喪った日本は、とっくに衰退への坂道を下り始めているのだ。つまり、これから我々が突入する未来は、エレベータが動かなくなった高層アパートが林立する現在のブエノスアイレスか、もしくは過去の偉大なインフラによって観光客を引き寄せる現在のエジプトに他ならない。

超大型のインフラの寿命は概ね百年を目途として建てられている。たとえば本四架橋や新都庁がそうだ。もちろん、上下水の配管や電装品などは逐次のアップデートが必要であり、最も基本的な躯体が百年もてば良いという見込みで設計してあるわけだ。しかし、百年後の日本がどういった状況に置かれているのかまで踏まえて建設されたインフラが一つでもあるだろうか？　そこまで考えるのは建築屋の仕事の範疇ではないし、百年先のことなど真面目に考えたところで仕方がない、というのが常識的な見方ではあるまいか。

本四架橋も青函トンネルも、いずれ必ず更新しなければならない時が来る。これらは使用を一時的に中止できる性質の建造物ではないから、現存の施設とは別に新しく橋やトンネルを作り、完成した時点で新旧の設備を切り換えることになる。問題は、現存している橋やトンネルはそれらを建設するのに最も向いた場所に作られていることだ。ベストな場所には既に設備が存在しているのだから、次の機会に作る設備は最初の時よりも必ず条件が劣る場所に建てることになってしまう。いきおい、予算も時間も余分にかかる。もしかしたら、更新用のインフラを建てるのが不可能なケースも出てくるに違いない。

ここまでは技術的な側面を見てきたが、もっと深刻なのは経済的なファクターだ。更新を実施するだけの国力が、百年後の日本に本当に備わっているのか。第二の教訓に従うなら、それは極めて怪しいと言わざるを得ない。この先、日本の人口が増加に転じる保証はないと考えるべきだろう。たとえ建設が可能だとしても、それを利用する人々が少なければ、インフラは存在意義を喪う。だとすれば、ピーク時の日本総人口１億２千万人をベースに据えたインフラをそのまま維持し、更新し続けたところで無駄なのだ。笑い話ではなく「大昔にはクルマや列車で本州から四国へ行けたんだってさ」「ひいじいちゃんが生きてた頃、北海道と青森が地続きだったらしいよ」といった事態が出来しかねない。

ここまでは話を解り易くするために本四架橋や青函トンネルといった巨大構造物を例に挙げたが、同じような事象は日本国中のありとあらゆる場所で起こる。労働人口が減り、税収が減り、国民の意欲が減れば、現在と同じ規模や品質のインフラを維持することは不可能になるし、仮に維持できたとしても無意味になる。その時、我々はどのように暮らしていくのか？　それを見越した上で、現在の我々は行動しなければならない。どうせ負け戦になるのは目に見えているのだから、可能な限り損失を減らし、納得できる妥協点を早く見出して、次のフェイズに軟着陸しなくてはいけない。さもなくば、日本は過去の栄光にしがみついたまま、ずるずると「かつて一等国だったことがある弱国」になり果てるだろう。小松左京は日本が海に沈む小説を書いたが、破滅へと至る道は沈没だけではない。

さとう・りょうへい（文筆業）

ヨーロッパ美術紀行　（17）

清水由美子

カラヴァッジョに魅せられて　２

不意に熱い突風に吹きつけられたように、身体がよじれたような気がした。思わず夫の視線を探り、小さく呟いた。「パゾリーニ！」

暗い背景から浮かび上がる、緑色がかった顔色の若者がかすかに微笑む《バッカスとしての自画像（病めるバッカス）》、細密画のように丹念に瑞々しく描かれた果物籠をもつメランコリックな表情の《果物籠を持つ少年》、聖人というよりは物憂げに腰掛ける少年としか見えない《洗礼者聖ヨハネ》の若者たちは、絵から抜け出してそろりと動き出せばパゾリーニの映画の登場人物そのままのイメージだ。そして、それがあまりに強烈な印象でたじろいでしまったのだ。この生々しさは何なのか？リアリズム？エロティシズム？画面そのものから一種のエロティシズムが醸し出されているのか、パゾリーニを連想してしまうがうえに同性愛的な含意を探ってしまうのか。

20 世紀イタリアの映画監督パゾリーニは、ボローニャ大学で美術史家ロベルト・ロンギの講義を聴き、大きな影響を受けている。ロベルト･ロンギといえば、１９５１年に展覧会を企画し、それまで忘却されていた画家に光をあて、美術史をはるかに越えた広範囲な関心、いわばカラヴァッジョ・ブームとも言えそうな今日のムードの端緒をつくったひとだ。ロンギは、もう一人のイタリアの画家、ピエロ・デッラ・フランチェスカをも再発掘している。１５年ほど前、イタリアはウンブリア地方のピエロ・デッラ・フランチェスカのフレスコ画の残る小さな町々を逸る気持ちで巡礼したことをまざまざと思い起こすことができる。それもロンギあってのことだったのか？

２０代の頃しばらく夢中で読んだことのあるモラヴィアはパゾリーニと大変親しかったし、パゾリーニ処女作の助監督を務めたベルトルッチには、「1900 年」を撮るあたりまで心酔したことがあったなあ、などと私が惹かれてきたものがこんな風につながっていることが妙に感慨深い。

ボルゲーゼ美術館の第８室に集められているのは、さらに３点。年老いたキリストの祖母の聖アンナが見守る中、母マリアに助けられて蛇を踏みつぶそうとしている幼いイエスを描いた《パラフレニエーリの聖母（蛇の聖母）》も力強い作品である。赤子ではなく、既に５～６歳位に見えるイエスが真っ裸なのはなぜだろうと思わずにいられない。当時のみならず、もしかしたら今も眉をひそめる人がいそうだ。

《聖ヒエロニスム》は、意外なほどシンプルな構図で、その端正さに胸打たれる。カラヴァッジョが反宗教改革の画家であったことを思い出させるものだ。ヒエロニスムは４人のラテン教父の一人で、彼がラテン語に訳した聖書は１６世紀のトレント公会議で公認され、プロテスタントの聖書のドイツ語化などへの動きに対抗したのである。

《ゴリアテの首を持つダヴィデ》の斬首されたゴリアテは、カラヴァッジョ自身と言われる。勝ち誇って黒々とした頭髪をつかんで差し出すはずのダヴィデの表情は、むしろ哀れみを帯びているように見える。カラヴァッジョがこの絵を描いたのは、ローマで殺人の罪に問われ逃亡の身となってからのことであるようだ。

ボルゲーゼ美術館でのカラヴァッジョとの出会いがあまりに強烈だったので、他の所蔵作品の影がいささか薄れてしまったというのが正直なところ。上階は絵画ギャラリーで、こちらを先に見ておけば良かったのだが・・・。当美術館の最大の目玉は、なんといってもティツィアーノの有名な寓意画《聖愛と俗愛》だろう。他にも、有名どころではラフェエロの《一角獣を抱く貴婦人》（ラファエロ作と特定したのは、またもやロベルト･ロンギ！）や《キリストの埋葬》、コレッジョの《ダナエ》があるし、マニエリスムの画家では、ブロンズィーノやアンドレア・デル・サルト、ヴァザーリ、ソドマも揃っている。

とりわけ嬉しかったのは、このところ関心を寄せている、１６世紀のフェラーラで、極めて知的な雰囲気で芸術家をひきつけたエステ家の宮廷画家、ドッソ・ドッシの作品が５点も所蔵されていたことである。内、特に有名な２点が何故か階下に置かれているのは、カラヴァッジョ同様特別扱いなのか。《女魔術師キルケー（またはメリッサ）》と《アポロとダフネ》（１９世紀になってもカラヴァッジョ作と思われていたらしい）である。メタリックな色使いが特異で、主題も一筋縄ではいかない難解さがある。ウィーンにあるドッシの《ゼウスとヘルメスと美徳（蝶を描く男）》の前で、その意味するところを考えあぐね、いつまでも佇んでいたことを思い出す。フェルメールとかカラヴァッジョ熱が少し冷めたら、いずれドッシあたりが注目株になってもおかしくないぞ、と密かに思っている。

この段階では、今回のローマ滞在の主要テーマが、ミケランジェロでもなくラフェエロでもなくなり、カラヴァッジョに収斂していくことになるとは、まだ認識していなかった。次に赴く、ドリア・パンフィーリ美術館で、全く趣の違うカラヴァッジョに出会い深く傾倒していくことにならなければ、パゾリーニ張りのカラヴァッジョ（いやカラヴァッジョ張りのパゾリーニが本当のところ）という偏見が生まれただけで終わったかもしれない。　（続く）

しみず・ゆみこ（ブリュッセル在住）

訂正とお詫び：先号のタイトル「フランス・ドライヴ旅行その８　カラヴァッジョに魅せられて」は、「カラヴァッジョに魅せられて　1」の誤りです。（編集部）

藤田博史・マンスリー連続対談の記録

会場：カフェ・バー『CREMASTER』２階　　主催：ユーロクリニーク文化部

第１回　鈴木　晶（法政大学教授）
テーマ：「身体」
2004 年 5 月 27 日

第 2 回　香山リカ（精神科医）
テーマ：「愛」
2004 年 6 月 28 日

第３回　湯浅博雄（東京大学教授）
テーマ：「記号と原記号」
2004 年 7 月 21 日

第４回　斉藤　環（精神科医）
テーマ：「リアルとはなにか」
2004 年 8 月 10 日

第５回　三潴末雄（ギャラリー主宰）
テーマ：「お行儀の悪い現代アート作家たちとともに」2004 年 9 月 16 日

第６回　飯島耕一（詩人）
テーマ：「江戸と西洋」
2004 年 10 月 28 日

第７回　多和田葉子（作家）
テーマ：「バイリンガルと創造性」
2005 年 4 月 8 日

第８回　川俣　正（美術家）
テーマ：「精神医療と芸術表現」
2005 年 5 月 12 日

昨年から始まった連続対談も今年の５月で第８回を迎えました。４月はドイツ在住の作家　多和田葉子氏に日本滞在の限られた時の合間を縫ってご出演いただきました。５月は、今秋開催される「横浜トリエンナーレ」の総合ディレクターとして多忙な日々を過ごしておられる美術家　川俣正氏をゲストにお迎えいたしました。この回は川俣ゼミ CafeTalk との共同企画という初の試みでもありました。

６月は対談はお休みですが、６月２５～２６日専修大学神田校舎にて日本ラカン協会主催　精神分析医藤田博史企画による『精神分析ワークショップ　Lecture & Open Debate』が開催されます。２６日のシンポジウムには、名古屋大学教授で精神分析医の小川豊昭氏と対談第４回ゲストの精神科医　斉藤環氏がシンポジストとして参加。聴講者も随時発言可能で活発かつスリリングな議論が期待されます。詳しくは本誌８ページの案内をご覧ください。

藤田博史・『マンスリー連続対談シリーズ』

カフェ・バー『CREMASTER（クレマスター）』2階

東京都新宿区歌舞伎町1-1-5 花園ゴールデン街

定員：10名　　入場料：2000円（１ドリンク付）

今後の予定は「精神分析医　藤田博史の公式サイト」
http://www.foujita.comに随時掲載いたします。
詳細はユーロクリニーク文化部　tel: 042-308-7637
E-mail: ys@euroclinique.com　までお気軽にお問い合わせください。

INFORMATION

◇ *Séminaire Privé*　通称「フジタゼミ」　毎週木曜日１９時より開催、参加費用＝会場代＋飲物代（合計で一人1000円です）
会場はカフェ・バー『CREMASTER（クレマスター）』2階　東京都新宿区歌舞伎町1-1-5 花園ゴールデン街 tel：03-3203-3620

◇ ２００５年４月１３日付朝日新聞夕刊に、「精神分析的実験バー　クレマスター」と同会場で開催された第７回マンスリー対談（ゲスト：多和田葉子氏）に関する記事が掲載されています。

◇ 雑誌『マンスリーM』７月号（５月２４日発売）に、クレマスターが紹介されています。

◇ 雑誌『ユリイカ』５月号『人形愛』特集に藤田博史、小川千惠子（DFJ）、榊山裕子が寄稿しています。

◇ 雑誌『ユリイカ』６月号に、ユーロクリニーク文化部主催　公開セミネール『心的構造論』の広告記事が掲載されています。

◇『セミネール通信』フリーペーパー版は、日仏会館（東京・恵比寿）、ストライプハウスギャラリー（東京・六本木）、東京ランダムウォーク六本木店（東京・六本木）、ギャラリー・ブックス・カフェ *appel*（東京・経堂）、ギャラリー・ノンク・プラッツ（東京・府中）、クレマスター（東京・新宿）、ユーロクリニーク（埼玉・所沢）等に置かれています。ユーロクリニーク文化部ではフリーペーパー版の郵送及びメールマガジン版の配信を受付けております。詳細はユーロクリニーク文化部(tel:042-308-7637)までお問い合せください。

精神分析ワークショップ
”Lecture & Open Debate”のご案内

会場：専修大学 神田校舎（東京都千代田区神田神保町3-8）

主催：日本ラカン協会　　協賛：ユーロクリニーク文化部

企画：精神分析医　藤田博史（公式サイト：http//www.foujita.com）

基本コンセプト：随時聴講者が発言できるディベート方式によるレクチャー

2005年6月25日（13:00～17:00）

13:00～14:45

Lecture & Open Debate<1>：全聴講者×藤田博史
「そもそも精神分析とはなにか？ー後期ラカン思想を考える」

15:00～17:00

Lecture & Open Debate<2>：全聴講者×藤田博史「臨床的視座ー美容整形と精神分析」

2005年6月26日（13:00～18:00）

13:00～14:20

Lecture & Open Debate<3>：全聴講者×藤田博史「日本的なるものと精神分析」

14:30～15:45

Lecture & Open Debate<4>：全聴講者×藤田博史「哲学、文学、倫理学、美学、心理学、社会学、サブカルチャーと精神分析」

16:00～18:00

Symposium & Open Debate：全聴講者×小川豊昭×斎藤環×藤田博史「精神分析の未来」

シンポジスト紹介

小川豊昭（おがわ・とよあき）：1954年生。名古屋大学総合保健体育科学センター/大学院医学系研究科精神健康医学教授・精神分析医（IPA会員）
斎藤環（さいとう・たまき）：1961年生。精神科医。現在、爽風会佐々木病院医長。在野の医師でありながら、「ひきこもり」研究の第一人者でもある
藤田博史（ふじた・ひろし）：1955年生。精神分析医、形成外科医、麻酔科医。現在、ユーロクリニーク院長、カフェバー・クレマスターオーナー

一般の方も参加可能です。詳細は日本ラカン協会のホームページ　（公式サイト：http://www1.ocn.ne.jp/~lsj/）をご覧いただくか、ユーロクリニーク文化部（tel: 042-308-7637　E-mail: ys@euroclinique.com）までお問い合わせください。

SÉMINAIRE OUVERT PERMANENT　Journal Mensuel Gratuit
Juin　2005　　No.21-40
月刊『セミネール通信』　フリーペーパー版　２００５年６月号
発行　EUROCLINIQUE　編集　ユーロクリニーク文化部　榊山裕子
tel: 042-308-7637　　E-mail: ys@euroclinique.com
メールマガジン版もあります。E-mail: seminaire@mac.com までお申し込み下さい。